庚申信仰

庚申信仰とは

中国の道教が教えるところでは、人間の身体のなかに三尸という虫がいて、60日ごとに回ってくる庚申の夜、人間を早死させようと、人間が眠っているすきに抜け出して天帝に悪口をいう。天帝はそれを聞いて人の寿命を決めるのですが、この日、身を慎んで徹夜すれば三尸は上天することができず、したがって長生きできるという説があります。中国の人々には、階層、性別をこえて広くこの教えが信じられ、実行されていました。これが奈良時代に伝来し、以後さまざまな民間信仰と結びついて広まっていったのが、日本の庚申信仰です。

庚申待ち

庚申の日に徹夜することを「庚申待ち」といいます。“長話しは庚申の晩に”という言い伝えは、かつて徹夜のとき、眠気ざましにおしゃべりをしたところから出たものと思われます。筑紫野市では50カ所で庚申待ちが行われていますが(1984年3月現在)、今では本当に徹夜をしているところはありません。

本市大字隈の倉本では、16軒が庚申講（庚申待ちのグループ）に加入しています。庚申の日、宿主は「今晩オコウシンサマでございますからお参り下さい」と各戸に案内します。午後8時ごろになるとみんなが集まり、順に庚申掛軸に向かい、柏手をうって礼拝します。

山口（平木）の庚申塔

文化3年(1806) 9月に建立された猿田彦大神の庚申塔。右側の竹に下げられているワラわんは、ダブリュウ(水神祭)が習合したものである。1982年8月撮影。

倉本の掛軸は猿田彦の画像ですが、地域によっては青面金剛が掛けられるところもあります。掛軸の前には、榊・灯明・賽銭・庚申団子が備えられます。庚申の集まりは、今では親睦会と考えられており、午後10時を過ぎるとお開きになるようです。

左は、隈（倉本）の庚申講。
1984年3月27日撮影。

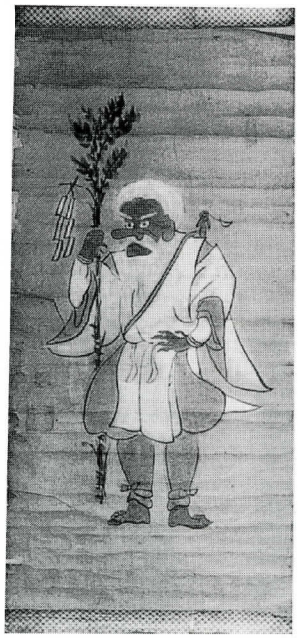
右は、山家（下西山）の庚申塔。
天明8年(1788) 6月建立の庚申尊天塔である。
1982年8月撮影。

庚申塔分布図

■庚申塔

庚申塔は、講の結成や庚申待ちの何周年かを記念して建てられた石塔で、おもに江戸～明治時代にかけて、流行しました。大別して神道系の「猿田彦大神」と仏教系の「庚申尊天」があり、「庚申」「庚申塔」「帝釈天」などと刻んだものもあります。市内では、110基が確認されていますが、そのうち山家宝満宮の参道入り口にある、正徳5年(1715)11月銘の猿田彦大神が最も古い庚申塔です。庚申信仰は、道祖神や塞神、田神などさまざまな信仰とも習合していますが、最も強いのは、作神としての信仰です。田植えが終わると庚申塔と家内の荒神に苗3束を供えるといった信仰が広く見られます。

さまざまな庚申掛軸



(右) 猿田彦大神（兎ヶ原）
(中) 猿田彦大神（隈・倉本）
(左) 青面金剛（石崎一組）

1991. 3. 31. 発行
1999. 2. 5000 SPS